

サヴォワ伯領の Charte de franchises

— 1194—1343 —

鈴 木 道 也

I はじめに

『フランス紀行』の著者アーサー・ヤングが「素朴な山の民の国」⁽¹⁾と評したサヴォワの地が脚光を浴びるのは、サヴォワ公が居所をシャンベリーからアルプス東部のトリノに移し、本格的にイタリア支配に乗りだした16世紀後半のシャルル・エマニュエル1世 (Charles Emmanuel I^{er}) 治世 (1580—1630) 以降のことであり、それ以前についての言及はわが国ではほとんど見受けられない。けれどもこの地は、神聖ローマ帝国とフランス王国の境界にあつて、フランス語圏に含まれながらも帝国の一諸侯領としての地位に留まり続け、⁽³⁾幾度となく盛衰を繰り返しつつ飛躍の16世紀への数世紀間勢力を維持していた。また内に目を転じればこのサヴォワ地方は、歴史的背景の異なる複数の小地域から構成されていたことが知られる。⁽³⁾ 同時期、サヴォワ

を挟んで西のフランス王国では王権の著しい拡大が、対して東の神聖ローマ帝国では諸領邦の分立といった相反する現象が生じていた。いずれの動きにも組み込まれることなく、サヴォワ地方が独自の自立性と統一性を維持しえたのは何故であらうか。この中世サヴォワの形成を考える上で、13世紀は一つの画期となる。伯による司法・行政組織の整備が相次いで行われるとともに、⁽⁵⁾サヴォワ家のトマッド・サヴォワ (Thomas de Savoie) に対してハインリッヒ7世から正式に「サヴォワ伯 (comes Sabaudie)」の称号が与えられている。そこで本稿ではこの時期を対象として、伯がどのような統治を志向し、また実際にどのような方策を用いていたのかを考えてみたい。

もっとも今回はその視角を伯とその直轄領内の領民との関係に限定する。12—13世紀の諸侯領構造を取り上げた最近の研究の多くが、むしろ諸侯と中小領主層との関係を重

視し、「レーン制的紐帯」に依拠しつつ表現される諸侯の統制権の形成過程に主眼を置いていることは確かである。⁽⁶⁾ 行政国家としての諸侯領形成史という研究の在り方を批判して展開された身分制研究が趨勢な現在にあっては、諸侯の官僚制的行政が展開される直轄領への関心が低下していることは疑い得ない。そしてこの時領民と諸侯との関係は、中小領主層に媒介された形で限定的に言及されるに過ぎない。しかし一諸侯領構造の本格的な検討に際して、領内の有力領主層の社会的・経済的發展を抑制するための財源を提供する経済的基盤にして、集権的支配の核ともなる諸侯直轄領の問題は前提である。また諸侯領の一体性を象徴する「諸侯の公的至上性が、封建的上位性とは異質なものである」とすれば、我々はこうした関心からも直轄領下の諸侯と領民関係が果たした意義に着目する必要がある。

さてこの諸侯と領民の具体的な関係をつかがわせる素材として注目したいのが、伯の手により直轄領内の多数の集落に起草・授与されたことが知られるCharte de franchisesである。この特許状は当時のフランス王国、特にその北東部で広く普及したことが知られており、既に十分な研究史的蓄積がある。そこでまずはこの北東フランスを中心とした研究の現況を整理し、同文書を用いてサヴォワ伯領構造の

特質を理解していくための一つの指針を得ることにする。

註

- (1) アーサー・ヤング(宮崎 洋訳)『フランス紀行』法政大学出版局、一九八三年、三〇四―三〇九頁。
- (2) 住民の誰もがフランス(オイル)語を解し、話していたことは15世紀にシャルル7世の式部官(Le hérald d'armes)を務めた Gilles le Bouvier が記している。C. Beaune, *Naissance de la nation France*, Paris, 1983, p. 403. また一四一四年のコンスタンツ公会議に参加した各「ネーション」は、言語の上である程度の同質性を持つまとまりとされていたが、フランスのネーションにはプロヴァンスやロレーヌとともにサヴォワも含まれていたことが知られている。下野義朗「中世フランスにおける国家と『国民』について―西欧中世国家史の研究序説―」世良晃志郎編『ヨーロッパ身分制社会の歴史と構造』創文社、一九八七年、六二五頁。
- (3) ミッタイス・リーベリッヒ(世良晃志郎訳)『ドイツ法制史概説』創文社、一九七一年、二六一―二六二頁。
- (4) L. Chabrio, *Origine et progrès de la istituzioni della monarchia di Savoia fino alle costituzioni del regno d'Italia*, Florence, 1869, p. 11.
- (5) 例えば中央には主要な封臣を集めて開かれる伯会議(13世紀初頭設置)や会計検査院(一二三〇年頃)が、また各地には地方行政の核となるバイイが置かれている(13世紀後半)。A. Perret, *Principaux organes de gouvernement de l'Etat savoyard de 1183 à 1323*, *Bulletin philologique et historique*

(jusqu'à 1610) du Comité des travaux historiques et scientifiques, année 1960, Paris, 1961, t. 1, pp. 345―360.

(6) 渡辺節夫『フランス中世政治権力構造の研究』東京大学出版会、一九九一年、一九二頁。

(7) 典型的には F. Lot et R. Fawtier (dir.), *Histoire des institutions françaises au moyen âge*, Paris, 1957.

(8) 渡辺節夫、前掲書、同頁。

II 研究の現況

先ずこれらの文書は、領主と領民共同体間に存在する諸慣習を両者合意の下で成文化したもの、という形式をとっていることから Charte de coutumes と呼ばれ、わが国ではこの表現にしたがって「慣習法文書」の訳語を充てている。そしてこの「慣習法文書」については、領民側の特権を広く認めていることから、領主の経済的圧迫に対抗する領民の意向を反映した、領民側の利益を保護するための文書であるとする理解が従来は一般的であった。しかし最近では、むしろこの文書の授与は、領主層特にこの文書を積極的にな成している諸侯層の政治的意図をより強く反映していると考えられている。具体的には、まずこの特許状を受領する集落は都市、農村、あるいは新たに開発されたものを問わず、いずれも諸侯層にとって権力の不安定な

地域に集中している。つまり特許状受領集落の多くは所領の辺境に位置し、隣接する聖俗諸侯の圧力が文書の授与前には常に確認される。特許状を対立諸侯と共同で授与することで、そうした係争の解決を直接の目的としている場合もある。次に領民の特権についてみると、確かに領民は様々な領主制的賦課を廃止ないし定額化されている。また領民側に役人選出の権限を与え、彼らに政治的機能を委ねている特許状も多い。しかし他方、領主側が留保している権利も多く、たいていの場合授与者の当該集落に対する裁判権限を明記している。それゆえこの文書は、修道院や貴族といった対抗勢力の介入を退け、諸侯が自分の支配権を安定させるために作成したものであった、とされる。領民の経済的負担を軽減し、ある程度の自治的機能を領民側に賦与しているのは、政治的集権化を承認させるための諸侯側の妥協であった。これらに加えて留意すべき点として、授与の対象となる集落の多様な政治的・社会的状況を背景として、文書の具体的な内容は多様であること、また当地の伝統的な慣習法の尊重という形式を原則的にとっている以上、諸侯が安易にそれを異なる法体系の下に変えることは出来なかったこと、等が確認されている。

ところで、かかる文書を特に諸侯の直轄領支配との関連で取り上げた研究は、サヴォワ伯領においてもいくつか存

在している。そこで次にこうした研究がどのような点に着目し、そこから何を導き出しているか確認したい。まず M. P. ヴァイヤンは、サヴォワ地方の慣習法文書は全て伯によって授与されたとして伯家の排他的な主導性を指摘する。次いで彼はアメーデ5世治世期(一二八五—一二三三)を画期とし、サヴォワ伯領の特許状授与を彼以前と以後の二つの段階に分けて考える。その際基準となるのは、特許状受領集落が伯領内で占める社会的性格の違いである。つまり第一段階の集落は主要交易路上に位置し、経済的観点から授与の対象とされたのに対し、第二段階では、戦略的・政治的な見地から特許状を授与する集落が選択されたのだと言う⁽⁶⁾。この見解をひきついで Ch. Ed. ベランも、サヴォワ伯領の特許状受領集落を①13世紀前半までの市場型集落と、②13世紀後半からの、敵対する近隣諸侯との境界上に位置する城砦型集落に区別した⁽⁷⁾。ただし M. P. ヴァイヤンが第一に指摘した特許状授与に際しての伯家の完全な主導性については、サヴォワ西方プレス地方のバジェ領主による特許状授与の事例を挙げて、伯家の中心的な役割を認めながらも、決してそれは排他的なものではなかったと指摘している。

これらに対して R. マリオット＝レーベルは、特許状の条文あるいはその他の史料に現れる用語の検討から、上記

のような段階的な理解を退けた。即ち、従来その経済的機能が重視されてきた集落を含め、全ての集落に付随もしくは近接して、領主制的な政治・軍事施設としての *castrum* (堡) が存在し、他方ほとんどの特許状中で週市 *forum* (mercatum) 及び大市 *annuae* に関する規定が確認されたのである⁽⁸⁾。つまり少なくとも受領集落の性格に関しては、政治的・経済的機能を併せ持つものとして彼は理解した。この主張を M. P. ヴァイヤンも受け入れたことは、彼の最近の論文からうかがえる。

こうして受領集落の性格については現時点で共通の理解を得た。ここであらためて問題となるのが、特許状の意義をどのように理解しているか、という点である。しかしこの点について諸研究者は一致して当該文書に関するフランス学界の一般的な見解を支持している。彼らは北東フランスの特許状との共通点を見いだすことで、それを根拠として、妥協的な側面を含みながらも全体としては伯側の意図を反映させた文書と見なしている。R. マリオット＝レーベルがシャンベリーの特許状の前文を引用しつつ「*Charte de franchises* は全体として領民の *libertas*」と授与領主の *justicia* を認め、確定するものであった。」と結論し⁽⁹⁾、また M. P. ヴァイヤンが「特許状の授与によって」住民共同体の解放と平行して領域諸侯の権力が発展せ

断っておきたい。

しめられた。」と述べる時⁽¹⁰⁾、我々は近年の一般的理解との

著しい類似をみることが出来る。そのためサヴォワ伯領の特許状が持つ独自性といったものを積極的に展開するにはいたっていない。しかし最終的にフランス王国に吸収されていた北東フランスの諸々の諸侯領と比べサヴォワ伯領は法的・社会的基盤や地理的条件を異にし、政治的帰結も異なっていたことは先に述べた通りである。この違いがサヴォワ伯領で普及した特許状に直接起因するものではないとしても、例えば文書の形式・内容上の相違、さらに授与前後の政治・社会状況の相違から、サヴォワ地方の自立性と統一性の確立に何らかの形で寄与した特許状の特質というものを指摘することが出来るのではないだろうか。

こうしたことを念頭において、以下サヴォワ伯領の特許状を、フランス王国内(特に北東フランス)のそれと比較しながら検討したい。そうすることでサヴォワ伯領におけるこの特許状の特質とその意義を明らかにし、伯領の統治構造解明のための一助としたい。加えて、その過程で当地の特許状の性格が一定程度以上の独自性を有することが明らかになれば、当然 *Charte de franchises* / *Charte de coutumes* 研究全体の中でその位置づけを考えたいことも必要とされよう。それゆえ本稿は、「慣習法文書」の地域類型的な把握のための予備的な考察でもあることを予め

註

- (1) R. Fossier, *Charte de coutume en Picardie (X^e - XIII^e siècle)* Paris, 1974, pp. 8-9.
- (2) 山田雅彦「北フランス中世盛期の都市と農村関係に関する研究——一九六〇年以降のフランス学界——」『史学雑誌』95編1号、一九八六年、八二頁。
- (3) 齊藤綱子「西欧中世慣習法文書の研究」九州大学出版会、一九九二年、四一九頁。
- (4) L. Génicot, *Recensements et tableaux et carte plutôt que des idées. L'exemple des chartes de franchises dans le comté de Namur (conférence à Université de Kyusyu, 1982)* 齊藤綱子訳「思ひこきより調査と図表を——ナントール伯領における慣習法特許状——」森本芳樹監修『歴史学の伝統と革新——ベルギー中世史学による寄与——』九州大学出版会、一九八四年、一二三—一二五頁。
- (5) その結果ひとつの諸侯領内に複数の系統の慣習法文書が混在することになる。拙稿「中世盛期フランス王国の慣習法文書」『西洋史研究』新編22号、一九九三年、一〇九頁。なおこの点については後述14頁参照。
- (6) P. Vaillant, *La politique d'affranchissement des comtes de Savoie (1195 - 1401)*, *Études historiques à la mémoire de Noël Didier*, 1960, pp. 315-323. (7) P. Vaillant, *La politique*

d'affranchissement. ヲ證^証。P. Vaillant, Les franchises des communautés savoyardes non émancipées par les comtes de Savoie (1195 – 1401), *Bulletin philologique et historique (jusqu'à 1610) du Comité des travaux historiques et scientifiques, année 1960*, Paris, 1961, t. 1, pp. 393–400. (以下 P. Vaillant, Les franchises. ヲ證^証)

(7) Ch. Ed. Perrin, Les chartes de franchises de la France. Etat des recherches : le Dauphiné et la Savoie, *Revue historique*, 1964, t. 32, pp. 51–54.

(8) R. Mariotte-Löber, *Ville et seigneurie. Les chartes de franchises des comtes de Savoie, fin XII^e siècle – 1343*, Annecy, 1973, pp. 9–13 et pp. 105–196.

(9) P. Vaillant, La politique des dauphins et comtes de Savoie quant à la diffusion des chartes de franchises, *La charte de Beaumont et les franchises municipales entre Loire et Rhin*, Nancy, 1988, pp. 245–246. (以下 P. Vaillant, La politique. ヲ證^証)

(10) R. Mariotte-Löber, *op. cit.*, p. 93.

(11) P. Vaillant, *La politique*, p. 248.

III 普及状況概観

前述した通り、サヴォワ地方は伯の主導下に結び合わされた幾つかの地域から構成されている。もともとサヴォワ (Savoie) という名は、シャルルマーニュの死後その孫

たずの間で行われた帝国の分割に際しロタールの国に含まれた“Sabardia”という地域に由来を持つ。これは中世サヴォワ伯領の一部にすぎず、その後この地域はブルグンド王国の一角を構成していた。しかし王国の衰退とともに家臣層に自立化傾向が現れ始め、11世紀初め「白い手」のアンベール (Humbert au blanches mains) はこのサヴォワにブリー (Belley) とアオスト (Aoste) を加えた三地域を勢力下に置いた。一〇三三年にブルグンド国王ルドルフ3世が死去すると、アンベールは王冠を狙うコンラッド2世を援助し、ブルグンド王国の崩壊に手を貸すことになる。神聖ローマ皇帝となった彼からモーリエンヌ (Maurienne) の地とモーリエンヌの伯位を授かり、また帝国修道院サン＝モーリス＝ダルコンヌ (St. Maurice d'Argonne) を含むシャブレ (Chablais) 地方も得た。さらに娘オーダンとトリノ侯アデレードと結婚させてタランテーズ (Tarantaise) 伯領をも獲得するに及んで、本稿が対象とする13世紀のサヴォワ伯領の中核地域が出来上がる。もっともこれらの所領が「サヴォワ伯領」という名で総称されるのは13世紀中頃からであり、当時は「モーリエンヌ伯領」と呼ばれていた。

さて、このアンベールから1世紀を経たトマッド＝サヴォワ治世の末年、都市アオストにサヴォワ地方初の

Charte de franchises が授与されて以降、特許状はこの地に広く普及していくことになる。表1は、サヴォワ伯領下で伯家からこの文書を受領した現状で確認される全集落である。授与は授与数の多寡に応じて便宜的に4期に分けることが出来る。第1期はトマッド＝サヴォワ (A…系図並びに表1で用いた伯家構成員の整理記号、以下同様) によって初めてこの地に特許状が授与された12世紀末から13世紀初めがそれに当たる。アオスト (1…表1中の整理番号、以下同様) やシャンペリー (4) といった、アルプスによって隔てられた伯領の東西の拠点や、伯領北部開発の拠点としてのヴィルヌーヴ (2) など、後に伯領の中核としての役割を担っていく集落に対して授与されている。次に第2期は伯アメーデ4世 (B) と伯ボニファス (C) の時期、即ち13世紀の前半がそれに当たる。この段階は全体として特許状の授与が不活発であった。それはこの時期皇帝フリードリヒ2世と教皇との抗争がイタリアを舞台に展開されており、皇帝側に立ってこの抗争に加わっていた伯が、所領経営への余裕を失っていたという事情によると思われる。

一連の抗争が一段落した13世紀の後半から14世紀にかけてピエール2世 (E)、フィリップ (F) としてアメーデ5世 (H) の治世において特許状の授与は最盛期を迎える。

これが第3期である。この間伯が周辺の諸侯と支配圏の拡大を巡って争っている事例は数知れない。例えば西ではドーフィネ公と、また北ではジュネーヴ伯やローザンヌ司教と、北東ではハプスブルグ家との争いが確認される。特許状の授与は伯領全体に及んでいるが、特に伯領北部のヴォー地域 (Vaud) (16/17/39/47/50) やブレス地方 (22/25)、あるいはドーフィネ地方と境を接する西のヴィエンヌ地方 (Vienne) (12/24/27/38) といったように、対抗する諸侯層と境を接する周辺地域にも授与が積極的に見られるようになっていく。しかし中でもアメーデ5世期の授与数は突出している。この間の事情を考えると、彼の登位直前の一二八二年に起きた「シチリアの晩禱」事件が影響しているように思われる。有名なこの事件はシチリアにおけるアンジュー家の勢力を退け、アラゴン王家にシチリア王位をもたらすことになった。が、実はサヴォワの地もまた同じアンジュー家とアラゴン家の脅威にさらされていた。アンジュー家は、名目上の存在と化していたアルル王国の再興をこの地に求め、またアラゴン家はドフィネ伯やジュネーヴ伯と協力してサヴォワ伯領の分割を意図していたのである。しかし幸いにして「シチリアの晩禱」の過程でアンジューの強勢は衰え、更にアラゴンもこの戦いに疲弊してサヴォワに侵入する余力を失ってしまった。

たこともあって、結局サヴォワの地に災いもたらされることは避けられた。中世的帝国理念の崩壊をもたらしたとされるこの一連の出来事の後、サヴォワの地ではアメーデ5世のもと特許状授与数の急増が確認されるのである。最後の第4期はエドアル(L)とエイモン(M)の治世、14世紀前半になる。第3期に比べ新しい特許状を受領する集落が減少するとともに、これまでの授与に対する確認文書の数が増していることから(表1の「授与者/確認者」の項参照)、既に文書授与の盛期は過ぎていくことが分かる。

こうして13世紀、特にその後半を中心に中核地帯から周辺地域へ、また次第に密度を濃くしながら特許状は普及していった。そしてこの普及の在り方は、諸侯領の全体的政治状況に対応している。伯が自己の所領政策に専心する余裕のある時、特許状もまた多く授与されている。北東フランスの場合と同様、特許状は伯の主導下で普及しているといえる。

一方、表1の「授与集」の項に見られるように、第1期から第3期前半までは既に文書授与以前に伯が集落の支配権を安定的に確定している場合(記号のAやE)が多いのに対し、第3期の途中からは不確定要素(I・O)が増加している。これは政治状況の不安定な周辺地域へと授与の対象が拡大されたことに対応している。例えばヴォー地方

を例にとれば、この地方で特許状を受領した集落のうち、終始安定してサヴォワ伯家の〈Justicia〉に服していたものは一つとしてない。レ・クレ(Les Clées)(29)やリュウ(Rue)(32)は、幾度かの衝突の後、最終的に未払いの負債の担保としてそれぞれジュネーヴ伯やリュウ領主から獲得した集落であった⁽⁷⁾。モルグ(Morges)(41)やラ・トゥール・ド・ペル(La Tour de Peilz)(28)は、特許状授与に遡る数十年前から当地で通行税徴収権や漁業権を行使していた複数の領主から、そうした諸権利を買い上げることで着々と支配権を集中していったものであった。⁽⁸⁾ヴォーリュ(Vaulruz)(53)やロモン(Romont)(60)も、購入によって獲得された集落である。またペイエルン(Payerne)(7)は、既に十世紀末に集落の存在が確認され、当地の修道院に対するアヴェエ権下でサヴォワ伯が実質的な支配を行っており、特許状も授与していた(一二四〇年)のであるが、その後ドイツ王ルドルフの、次いでハインリッヒ7世の侵略を受け、ようやく一三三六年に伯エイモンが一二四〇年の特許状に対する確認文書を授与して以降、安定を取り戻している。⁽⁹⁾さらにグランクール(Grandcour)(17)やロル(Rolle)(25)にいたっては、在地領主から支配権を完全に獲得することに失敗し、特許状授与に際してもそれぞれエスタヴィエ領主とモン領主を

共同領主としている⁽¹⁰⁾。しかしいずれにしても、つまり金銭の支払いによる中小領主層からの買い上げにせよ⁽¹¹⁾軍行動の勝利にせよ、特許状の授与に先行する形で支配権の獲得が行われている点に注意すべきであろう。

この点について北東フランスはどうであったか。北東フランスの特許状は、常在地支配権の不安定な時期及び地域に授与され、それが一諸侯によって排他的に行われるにせよ、複数の者によって協同的・妥協的になされるにせよ、支配権の確定と平行し、まさにそうした役割を担うものとして現れていたといえる。北東フランスの特許状が領主制の枠内で説明される時、特許状が果たしたこの役割は特許状の内容とともに重要な論拠となっていた。こうしたことからすれば、サヴォワ伯領の特許状は単に支配権の安定にとどまらない、より高度な機能を果たすことを期待されていたのではないか、という推測を抱くことが出来る。ではその内容はいかなるものであったのか、次にこの点について見てみよう。

註

(1) L. Cibrario, *op. cit.*, p. 5.

(2) C. W. Previte-Orton, *The early history of the house of Savoy, 1000-1233*, Cambridge, 1912, pp. 16-21.

(3) L. Falletti, *Éléments d'un tableau chronologique des franchises de Savoie, Revue suisse*, t. 78, 1937, pp. 133-135.

(4) C. W. Previte-Orton, *op. cit.*, p. 30.

(5) E. Cox, *The Eagles of Savoy*, Princeton, 1974, pp. 320-325.

(6) *ibid.*, pp. 433-440.

(7) J. Bugnion, *Les villes de franchises au Pays de Vaud (1144-1350)*, Lausanne, 1962, p. 56.; R. Mariotte-Löber, *op. cit.*, pp. 140-141.

(8) J. Bugnion, *op. cit.*, p. 31 et p. 55.; R. Mariotte-Löber, *op. cit.*, pp. 145-146 et pp. 135-137.

(9) J. Bugnion, *op. cit.*, p. 32 et p. 56.

(10) *ibid.*, p. 52.; R. Mariotte-Löber, *op. cit.*, pp. 151-153.

(11) J. Bugnion, *op. cit.*, p. 57.

(12) この結果、サヴォワ伯領の場合直轄地の獲得に極めて多くの金銭を必要としている。確かにフランシーズを獲得するために住民側から支払われた納入金が、今度は伯によって、集落並びにそこに居住する住民に関する諸権限を中小領主から買い上げるのに用いられたということはある。しかし例えば、特許状授与に際して住民から五〇リールを受け取ったことが知られるシャテル＝サン＝ドニ(43)の場合、この集落の支配権を購入するのに伯が三八〇リールを支払ったのを見れば(P. Philippon, *Histoire de la seigneurie et du bailliage de Châtel Saint Denis, Fribourg*, 1921, p. 60.)、それだけでは見合わなかったことが容易に理解される。それを埋め合わせるためにも伯には安定的な収入源を確保しておく必要があった。後述19-20頁参照。

[凡例並びに註]

○授与者/確認者

○記号A~Hは系図内のものに従う。
 † 1 : 1283年の確認状は Rodolphe Iが授与
 † 2 : Le Pape Innocent IV, Guy (seigneur de Bage)
 が共同授与者

○地域

Ao.: Aoste Sa.: Savoie
 Br.: Bresse Va.: Vaud
 Bu.: Bugey Vi.: Vienne
 Ch.: Chablais seV.: seigneurie de Vaud
 et Genevois † 3: Duché de Bourgogne
 No.: Novalaise

○集落形態

V : villa vb : villa burgrm
 vn : villa nova cv : castrum et villa
 c : castrum co : communitas
 († castrum sive villa)
 cbv : castrum et burgum atque villa
 † 4 : civitas cum suburbii
 † 5 : homines de . . .

○授与集 (授与者と受領集落との関係)

A : 既にサヴォワ家の直轄下にある場合
 I : 授与の直前に他領主から当地の支配権を購
 入している場合

●一世俗領主から ▲一教会領主から
 U : 授与以前に、婚姻関係の成立によってサ
 ヴォワ家の支配下に入った集落
 E : 授与時においても他の共同領主が存在している場合
 O : 授与以前に闘争の結果獲得された集落

○授与形式

・当該文書は集落に何を与えるものであるの
 か、について特許状前文中の表現から抽出
 ・文書表現は特許状によって多様であるが、用られ
 ている主要語から以下のように整理した。

li. : libertas (L.: Lugdoni = Lyon)
 fr. : franchisia
 ju. : jus
 co. : consuetudo (M.: Melduno = Moudon)
 pr. : privileges
 us. : asagium

[典拠]

Aoste, Chambéry, Billat: L. Cibrario, *Documenti sigilli e monete appartenenti alla storia della monarchia di Savoia*, Turin, 1833.; Villeneuve de Chillon, Payerne, Moudon, Grandcour, La Tour de Peilz, Les Clées, Rue, Aigle, Nyon, Morges, Châtel St. Denis, Mont le Vieux, Vaulruz, Romont : F. Forel, *Chartes communales*; Sembrancher, Bagé, Pont de Vaux, St. Genix, Seyssel, Le Châtelard, Léaz, Ballon: A. Dufour, *Documents inédits relatifs à la Savoie, extraits de diverses archives de Turin*, Turin, 1860.; St. Symphorien d'Ozon, Tolvon, La Côté St. André, St. Georges d'Esperanche, St. Laurent du Pont, Pont de Beauvoisin, St. Jean de Bournay, Septême: P. Vail lant, *Les libertés des communautés dauphinoises*, Paris, 1951.; Bourg: J. Brossard, *Cartulaire de Bourg en Bresse*, Bourg en Bresse, 1882.; Etroubles, Valdigne, Morgex, Valsavranche: J. B. de Tillier, *Le franchigie delle comunità del ducato di Aosta*, Turin, 1965.; St. Germain sur Séz: C. Freppaz, *Les franchises de Saint Germain sur Séz*, *Revue de Savoie*, 1959, pp. 262-280.; Yenne: S. Guichenon, *Histoire généalogique de la Royale Maison de Savoie*, Turin, 1778; St. Julien de Maurienne, Ceyzérieu, La Rochette, Saillon, Châtillon-sur, Chalaronne, Villeneuve de Châtel Argent, Pont de Veyle, Sagy, St. Maurice, Cusy, St. Rambert, Ugine, Tournon, Pont d'Ain, Faverges, Bard, St. Germain d' Ambériou, Allinges Neuf, Ordonnaz: R. Mariotte-Löber, *Ville et seigneurie*; Yverdon: R. Déglon, *Yverdon au Moyen Age (XIII-XV siècle)*, Lausanne, 1949.

○サヴォワ家系図

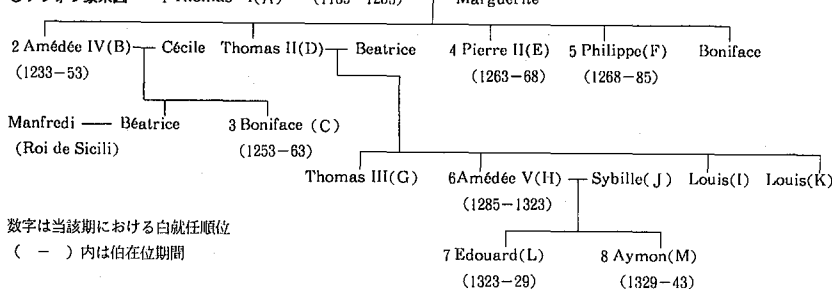


表 1 : サヴォワ伯家による Charte de franchises の授与 [1196 - 1341]

集落名	授与年/確認年	授与者/確認者	地域	集落形態	授与集	授与形式
1 Aoste	1196 / 1253 / 71 / 96 / 1326 / 33	A/D/F/H/L/M	Ao.	† 4	エ	li.
2 Villeneuve de Chillon	1214 / 52 / 87	A/B/H	Ch.	vn	ア	li.
3 Yenne	1215	A	No.	v	エ	fr.
4 Chambéry	1232 / 85	A/H	Sa.	v	イ●	li.
5 Montmélian	1233 / 1331	B/M	"	cbv	ア	li.
6 Sembrancher	1239 / 90 / 1324	B/H/L	Ch.	v	ア	li.
7 Payerne	1240 / 1336	E/I 1/L/M	Ch.	v	エ	li. et ju.
8 Etroubles	1246	B/H	Ao.	vb	ア	li.
9 Bourg	1250 / 51 / 90 / 1329 / 31	F/H † 2/L/M	Br.	v	エ	fr. et li.
10 Bâgé	1250 / 78 / 1336	F/H / M	"	v	エ	fr. et li.
11 Pont de Vaux	1251 / 1336	F/M	"	v	エ	fr. et li.
12 St. Symphorien d'Ozon	1257 / 95 / 1325	F/H/L	vi.	v	エ	li.
13 St. Germain de Séz	1259	C	Sa.	† 5	ア	-
14 St. Julien de Maurienne	1264 / 76 / 1314	E/F/H	"	v	ア	li.
15 Evian	1265 / 79 / 85 / 1326 / 30	E/F/H/L/M	Ch.	v	ア	li. et fr.
16 Moudon	1268 / 1285 / 85 / 1328; 41	E/F/H/K	Va.	c → v	ア	co. et fr.
17 Grandcour	1268 / 1268-85 / 93	E/F/1	"	c	エ	ju. et co. M
18 Thonon	1268 / 1301 / 24	F/H/L	Ch.	oppidum	エ	li.
19 Tolvon	1268-85	F	No.	b	イ●	li.
20 St. Genix	1270	G	"	cb	イ	li.
21 Saillon	1271 / 1330	F/M	Ch.	cv	イ●	li.
22 Châtillon sur Chalaronne	1273	F	Br.	cv	ウ	fr. et li.
23 Villeneuve de Châtel Argent	1273 / 1326	F/L	Ao.	vn	ア	li.
24 La Cote St. André	1274 / 85; 1301; 23 / 23 / 2 9-43	F/H/L/M	Vi.	v	ア	li. l.
25 Pont de Veyle	1275	H/J	Br.	v	ウ	fr. et li.
26 Sagy	1276	H/J	† 3	cv	ウ	fr. et li.
27 St. Georges d'Esperanche	1280 / 91 / 1323 / 31	F/H/L/M	Vi.	vn	イ▲	li. l.
28 La Tour de Peilz	1282 / 88; 1300; 17 / 24 / 3 0; 31; 43	F/H/L/M	Ch.	v	イ●	li. et us.
29 Les Clées	1285 / 1329	H/K	seV	b	オ	ju. et co. M
30 St. Maurice	1285; 1315 / 24 / 32; 38	H/L/M	Ch.	b †	オ	li. et fr.
31 St. Laurent du Pont	1285-1323 / 24	H/L	No.	vn	イ●	li. et fr.
32 Rue	1285-1323	H	seV	b	オ	?
33 Seyssel	1286 / 1327	H/L	Bu.	v	ア	ju. et li.
34 Aigle	1288	H	Ch.	v	ア	li. et fr.
35 Cusy	1288	H	Sa.	v	ア	li. et fr.
36 Pont de Beauvoisin	1288	H	No.	v	イ●	li. et fr.
37 St. Rambert	1288	H	Bu.	v	ウ	fr. et pr.
38 St. Jean de Bournay	1292 / 1323-29 / 1329-43	H/L/M	Vi.	v	オ	li. l.
39 Nyon	1293	H	Va.	b	オ・エ	li. et co. M
40 Ugine	1293	H	Sa.	b	ア	?
41 Morges	1293 / 1328	I/K	seV	v	イ●	fr.
42 Valdigne	1295 / 1324	H/L	Ao.	v	ア	li. et fr.
43 Châtel St. Denis	1300	H/M	Ch.	vn	イ●	ju. et co. M
44 Tournon	1301 / 24	H	Sa.	b → v	ウ	ju. et li.
45 Le Châtelard	1305 / 25	H/L	Sa.	v	ア	ju. et li.
46 Morgex	1314	H/L	Ao.	v	ア	li. et fr.
47 Mont le Vieux	1316; 19	K	seV	b	オ	ju. et co. M
48 Pont d'Ain	1318	H	Br.	vn → b	オ	li. et fr.
49 Faverges	1318; 28	H	Sa.	b	イ●	?
50 Yverdon	1319 / 29	K	Va.	v → b	イ	fr. et li M
51 Ceyzérieu	1320	H/L	Br.	v	イ●	fr.
52 Valsavranche	1320	H/L	Ao.	co	ア	-
53 Vaulruz	1324	K	seV	c †	イ●	fr. et li. M
54 Billat	1324	L	Bu.	v	ア	fr. et pr.
55 Léaz	1324	L	Bu.	v	ア?	li. et ju.
56 Yvoire	1324	L	Ch.	v → b	オ	li. et fr.
57 Ballon	1326	L	Bu.	v → b	オ	pr. ju. et fr
58 Bard	1326	L	Ao.	v	オ	li. et fr.
59 St. Germain d' Ambériou	1328	M	Br.	c → b	エ	li. et fr.
60 Romont	1328	K	Va.	c	イ●	ju. et co. M
61 La Rochette	1329	L	Sa.	b → v	イ●	fr. pr. et li.
62 Rolle	1330	K	seV	vn	エ	li. et fr.
63 Allinges Neuf	1330	M	Ch.	b	エ	li. et fr.
64 Ordonnaz	1337	M	Bu.	vn	エ	fr. et li.
65 Septême	1341	M	Vi.	b	エ	li. et fr.

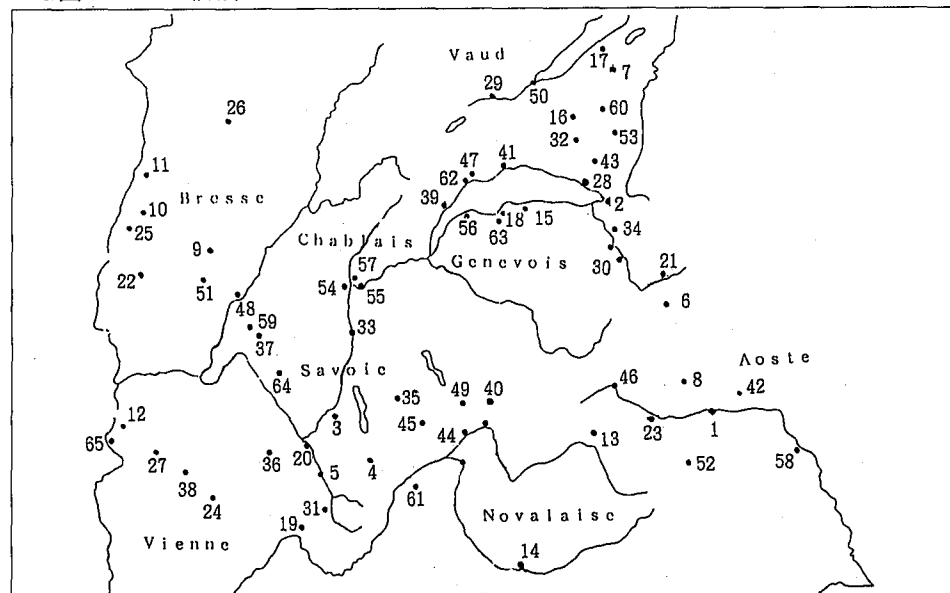
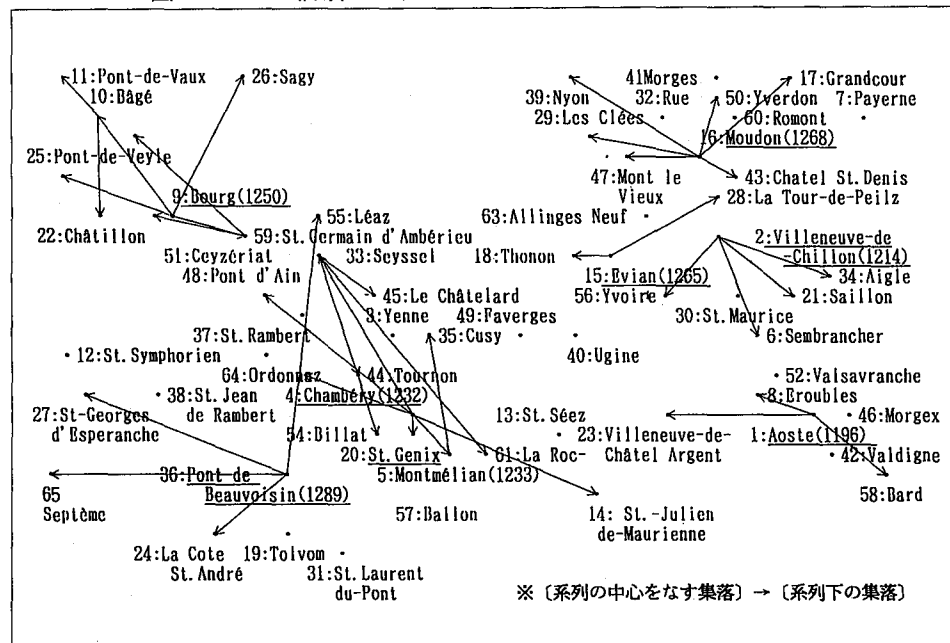


図1:サヴォワ伯領におけるCharte de franchisesの系列



IV 形式及び内容の独自性

(1) 「系列」について

以下では特許状の具体的な内容を検討するが、その前に伯領内の特許状が幾つかの「系列 (les familles)」に分類されることを確認しておく必要がある。それぞれの系列を代表する特許状をとりあげること、サヴォワ伯領に普及した特許状の全体像をつかむことが出来ると思われる。

まず系列とはどのように確定されたものか、R. マリオット・レーベルにしたがって見てみよう。彼は個々の特許状の条項に番号を付し、次いで複数の特許状間で、同一の内容を持つ条文の配列順序と記載様式に著しい類似関係が見られる場合、両者が同じ系列に含まれると判断し、それぞれの系列の中で年代的に最も古い時期に起草・授与された特許状の名をそれぞれの系列名とした¹⁾。この結果サヴォワ伯領では次の9つの系列が確認された。アオスト (1: Aoste)、ヴィルヌーヴ・ド・シロン (2: Villeneuve de Chillon)、シャンベリー (4: Chambéry)、ブル (6: Bourg)、エヴィアン (15: Evian)、サン・ジュニ (20: St. Genix)、モドン (16: Moudon)、ポン・ド・ブーヴォワ (36: Pont de Beauvoisin)、サン・モーリス (30: St. Maurice)。このうちエヴィアン系列の特許状は、

一三二四年以降の一連の改訂過程を通じて全てサン・モーリス系列に含まれるようになった、と見做される³⁾。またサン・ジュニ系列は、条項の配列において多少の相違はあるものの、シャンベリー系列との共通性が高い³⁾。そこでこの2系列をそれぞれサン・モーリスとシャンベリーの系列に含めると、系列は全体で7つにまとめられる。こうしてまとめられた7系列の普及範囲は、一三二九年に確定されるサヴォワ伯領の7つの上級裁判管区 (「バヤージュ」) の区分とはほぼ一致している³⁾。そしてこれらの系列を代表する7特許状の内容を検討することで、我々はサヴォワ伯領の特許状の全体像をうかがい知ることが出来るであろう。

ところが、この系列に関してはつぎの二つの点で注意が必要である。ひとつは、北東フランス地方の特許状の伝播がもたらす「系列 (les filiations)」とサヴォワ伯領のそれとの相違であり、もうひとつはサヴォワ伯領の系列間に見られる性格の違いである。第1の点について。わが国でも良く知られる「ロリスの法」や「ボーモン・タン・ナルゴンヌの法」(以下「ボーモンの法」と略) は、それぞれが母法となつてその後北東フランス地方の多数の集落に伝播したことが知られている。しかしこの場合、「ロリスの法」や「ボーモンの法」を頂点として形成される系列は、R. マリオット・レーベルらが指摘するサヴォワ伯領下の

表2:サヴォワ伯領下の特許状の一般的な形式(1232年シャンベリー(Chambéry)の特許状)

[前文]		
[本文]		
条項	1: 住民による遺言作成の承認	29: 暴力行為が流血に及んだ場合の罰金
	2: 遺言のない場合の遺産の分配	30: 暴力行為に対する罰金(杖を用いた場合)
	3: 住民による軍役奉仕の期間とその範囲	31: 住居に不法に侵入した者への罰金
	4: 干し草運搬賦役の免除	32: 他人の髪を毛を引いた者への罰金
	5: 領主の信用買いの承認とその支払い猶予期間	33: 悪口を言った者への暴力行為(拳など)に対する罰金免除
	6: 領主の役人の宿泊権とその内容について	34: 正当防衛としての暴力行為に対する罰金免除
	7: 領主の宿泊権とその内容について	35: 誤った量のワインや塩を売った者に対する罰金
	8: 領主に支払われるターユの定額化	36: 不正な秤や升を用いた者に対する罰金
	9: 住民への市場開設権の承認	37: 再犯者を伯の裁判下に置くことについて
	10: 自領主の許可のない、当該集落への居住の禁止	38: 控訴の場合の控訴料の支払いについて
	11: 移住後一年と一日を経た者の住民としての認可	39: 被控訴人側の保証人の提出について
	12: 家屋売買の収入に対する一定額の税の支払い	40: 根拠のない控訴の場合の罰金
	13: 領主保有の不動産移動に関する税の支払い	41: 訴えのない暴力行為の処理について
	14: 不動産売買の収入に対する一定額の税の支払い	42: 犯罪行為の立証の為の証人の提出について
	15: 家屋の間口に比例してかけられる税の支払い	43: 自宅内での暴行・殴打の罰金
	16: 15条で規定された税の税額	44: 窃盗・謀反・殺人の罪を犯した者を伯の裁判下に置くことについて
	17: パン焼き竈並びに水車の領主所有について	45: 市場での暴力行為または窃盗に対する罰金
	18: 領主所有のパン焼き竈・水車の使用義務	46: 放火を犯した者に対する罰金と領主裁判の実施
	19: "	47: 姦通罪を犯したものに対する罰金
	20: 市場で騒乱を起こした者の罰金について	48: 姦通罪の立証と、その免除について
	21: 入市税の未払い者への罰金について	49: 暴力行為等に対する賠償の支払いについて
	22: 暴力行為に対する罰金(拳を用いた場合)	50: 12歳以下の者に対する上記の諸規程の不適
	23: " (平手 ")	用について
	24: " (足 ")	
	25: " (短剣・剣 ")	
	26: " (槍 ")	
	27: " (石 ")	
	28: " (石を投げた場合)	

[後文]

表2(a)

領主制的賦課に関する規定: 3・4・6・7・8・15・16・17・18・19	=10条項
商業・市場関係規定: 9・20・21・35・36・45	=6条項
刑法関係規定: 22・23・24・25・26・27・28・29・30・31・32・33・34・37・38・39・40・41・42・43・44・46・47・48・49	=25条項
民事関係規定: 1・2・5・12・13・14	=6条項
住民資格規定: 10・11・50	=3条項
計	50条項

[典拠] L.Cibrario, *op. cit.*, pp.126-133.より作成。

「系列 (les familles)」とは以下三点が異なっている。
 ①系列の判断基準: 「ロリスの法」や「ポーモンの法」などの系列に属しているか否かといった判断は、個々の特許状の前文に、それぞれ「ロリスの諸慣習を認める」ないしは「ポーモンの諸慣習を認める」旨の記載が確認されるか否か、に依っている。^②同系列特許状間の内容①に従って確定された北東フランスの系列内では特許状の内容に必ずしも著しい共通性はなく、特許状を授与する領主側の、あるいは集落側の社会的状況に従って内容が大きく異なる場合も確認される。さらに、特許状前文において特定の系列に属することが確認されるのみで、具体的な内容部分を全く伴わないものも存在している。^③系列の普及範囲: 北東フランスの系列の普及範囲は特定の諸侯領内にとどまることなく、複数の諸侯領にまたがるものもあるなど、かなり広い。^④

次に第2の点、サヴォワ伯領の系列間での性格の相違について。これは上で指摘した北東フランスの「系列」に見られる上記①③の特徴が、実はサヴォワ伯領内の特定の系列について確認されることを意味している。即ち7系列のうち、モードン系列を①③に对照させて見ると、①この系列に属する特許状は全て前文でそれが「モードンの法」を認めるものであることを宣言しており、②モードン系列

下のグランクール、モンール・ビュ、ロマン、モルジュ、レ・クレの特許状には具体的な条文が存在していない。^⑤また、③モードン系列の特許状は、サヴォワ伯ばかりではなくヴォー地方の数多くの有力領主の手によって起草・授与されたことが、ブニョンの研究で確認されている。^⑥これまで指摘されることのなかったこの二点は、サヴォワ伯領の特許状の独自性とその背景を考える上で看過することはできない。^⑦

(2) Charte de franchisesの内容

①領民の特権・義務

さて、あらためて各系列を代表する7特許状の内容について、まずは領民側の視点から、特許状の受領により領民が獲得した特権と依然として課されていた賦課の内容を明確にする。表2は、シャンベリー系列を例に、特許状の一般的な形式を条項順に示したもので、それを内容別に分けると表2(a)のようになる。ここからは、刑法関係の規定に多くの条項を割いていること、また領主制的賦課に関する規定と並んで商業関係の規定が多く含まれていることが分かるが、本項では領主制的諸賦課に関する部分と民事関係規定を取り上げる。表3は、その具体的な内容について上に挙げた7特許状をまとめたものである。

まず領民への恣意的な賦課を代表するターユについて見

ると、「我々は当該集落において毎年8月に7.3s.のター
ユを受ける権利を有していたが、住民は今後このター
ユを一年の同じ時期に同額を servitius の名で支払うこ
とを約束すべし」[CHAMBERY 8: シャンベリーの特
許状、第8条、以下同様]「今後余ならびにその後継者達
は、恣意的なターユ (tallia) あるは援税 (exactionen
invitas) を設けることとはなす」[AOSTE 9]「ターユ並
びにその他のあらゆる規定外の賦課から(住民は「筆者」
自由となるだろう)」「VILLE NEUVE 4」「集落は全て
の不当なる賦課より解放される」[ST. MAURICE 4]と
表現に多少の差はあれ、いずれの特許状も定額化ないしは
廃止している。また家屋税・入市税・不動産売買税につ
いては税額や割合が固定化されている。さらに表2の第1条
「当該集落において、もし遺言をなした者が死んだ時には、
その遺言状は効果を持ち、またそれが厳格に守られるべき
である」と第2条「しかして、もし遺言なく死亡した男性
もしくは女性がいた場合、その正当なる相続人がその者を
相続するであろう。即ち、子供達、最も近い父系親族と母
系親族である」から窺えるように、遺言を通じて個人的な
財産の自由処分も認められている。では、これらの規定は
従来の領主制的賦課を大きく軽減するものといえるのであ
ろうか。

集落が特許状受領の直前に置かれていた経済状況につ
いて、ここである集落の城代が残した会計記録 (compte)
を手がかりに考えてみたい。それは城代ルドルフ・モート
ン (Rodolphe Moudon) が作成し、バイイに対して報告
した一二六六年の集落イヴェルダンに関するものである。
これによると、およそ80戸からなるこの集落から城代は一
年間に中間役人の取り分を除いて2371.15d. の収入を得て
いる。このうちその年に収穫された小麦 (50.5muid) 、ラ
イ麦 (14.75muid) 、燕麦 (49.86muid) の総売上げが133
1.2s. 7d. となって全体の44%と収入の重要な部分をなして
いる。ただし、生産物賃租として領民から徴収されたのは
このうち小麦がわずかに1muid、燕麦も4muid に過ぎず、
一戸当たりに換算すると小麦が1.8boisseau、また燕麦
が14.4boisseauの少額になってしまふ。また領民からの
地代総額も221.8s. 8d. にとどまっている。この地では領主
直営地からの収穫がその大部分をなしていた。伯所有の牧
草地からの牧草や秣の売却益も47.14s. 2d. と全体の16%
を占めている。それゆえ、一連の領主制的賦課に関する規
定は、確かに領主並びにその役人の恣意性は排除するであ
ろうが、ただちに領民の負担を軽減するものではなかった。
多くの特許状が廃止していたターユは、この年集落全体で
はもととも僅か10s. しか徴収されていない。他方、伯に231.

表3: 主要Charte de franchisesの内容

項目	家屋税*	不動産売買税 買手*2 売手	ター ユ	バナリテ 升・秤	電 水車	葡萄酒 専売期間	A	B	C	D	E	F
Aoste	12→6d.		廃	△	◎			40日	4d.	◎		○
Chillon	8→6d.	1/13	1/13	◎	◎	15日間		40日	4d.	◎		○
Chambéry	9→6d.	1/13		◎	◎			40日	4d.	◎		○
Bourg	6→4d.	1/12	1/12	◎	◎			15日	4d.	◎		○
St. Maurice	6→4d.	1/12	1/13	◎	◎	1ヵ月	◎	40日	4d.	◎		○
Moudon	2d.		◎	◎	◎			40日	4d.	◎		○
Beauvoisin	6d.	1/6	◎	◎	◎	1ヵ月	◎	40日	4d.	◎		○

(項目) A: 市場開設権 B: 領主支払い猶予 C: 入市税 D: 宿泊権 E: 軍役 F: 罰金

(凡例) d: deniers 廃: 廃止 定: 定額・定量化 ◎: 領主側留保 △: 領主と集落の共同所有 ○: 記載あり

[註] *1: 家屋の間口を計り、1トワズ (toise) = 1.95m につき支払われる税。[→] のついで
いるものは、普及の過程において、同系列の特許状であっても額が変動しているもの。

*2: 不動産の移転に伴って領主に支払われる税。売手・買手とも総売買額のうち表に示した
割合を税として支払う。

※但しサヴォワ伯領では4種の貨幣が用いられており、賦課額を単純に比較することは出来ない。上
記の表では Aoste, Chambéry, Bourg, Pont de Beauvoisin ではヴィエンヌ貨幣 (monnaie de
Viennoise) が、Villeneuve de Chillon ではサン・モリス貨幣 (monnaie de St. Maurice)
が、St. Maurice, Moudon ではローザンヌ・ジュネーブ貨幣 (monnaie de Lausanne et de
Genève) が用いられている。(残り1種は、マコン貨幣 (monnaie de Mâcon) であり、伯領北
西で一部使用。) 因みに当該期の交換比率は概ね以下の通り。

(1 deniers viennoise = 3/4 deniers Lausanne et de Genève = 1/2 deniers St. Maurice)

表4: 罰金の内容

①一般犯罪行為に対する罰金額

項目	A	B	C	D	A	イ	ウ	エ	オ	カ	E	A	イ	ウ	F	G
Aoste	60s.	60s.		60l.				60l.				60s.	10s.	60s.	○	60l.
Chillon	60s.		60s.	60l.											○	60s.
Chambéry	60s.		60s.	60s.				6l.							60l.	60s.
Bourg	60s.	7s.											7s.	○		60s.
St. Maurice	60s.				60s.	○			60s.	6l.						60s.
Moudon	60s.			60s.				60l.				10s.	60s.			60s.
Beauvoisin	60s.	60s.	60s.	60s.	60s.	6l.			60s.	6l.		5s.	60s.	60l.	○	

①の項目

A - 姦通罪 B - 武器の不法所持 C - 軍役不履行 E - ア自宅内での暴行・殴打
D - ア家屋破損 (イ日中の場合 ウ夜間の場合) (イ日中の場合 ウ夜間の場合)
エ家宅不法侵入 (オ日中の場合 カ夜間の場合) F - 放火罪 G - 偽証罪

②暴力行為に対する罰金額

項目	A	B	C	D	E	F	G	H	I	A	イ
Aoste	20s.	10s.	30s.	30s.		60s.	60s.		10s.	5s.	
Chillon	3s.	5s.	10s.	60s.	60s.	60s.	60s.		10s.	5s.	
Chambéry	3s.	5s.	10s.	60s.		60s.	60s.	60s.	10s.	5s.	
Bourg	3s.	5s.		7s.	60s.	60s.	60s.		10s.		
St. Maurice	3s.	5s.	7s.	20s.		60s.	60s.	60s.	10s.	5s.	
Moudon	3s.	5s.	10s.	60s.		60s.	60s.	60s.	10s.		
Beauvoisin	7s.		7s.	7s.	60s.	60s.	60s.		7s.		

②の項目

A - 拳を用いた傷害罪
B - 平手 " "
C - 石 " "
D - 杖・棒 " "
E - 宝石を用いた傷害罪
F - 傷害流血罪
G - 剣や槍を用いた傷害罪
H - 窃盗罪
I - 毛髪を引っ張った罪
(ア両手の場合
イ片手の場合)

③商行為上の違反に対する罰金額

項目	A	B	C	A	イ	D	A	イ	E
Aoste						60s.			
Chillon						60s.			
Chambéry	60s.		15s.						60s.
Bourg	60s.		60s.	60s.	60s.	60s.			
St. Maurice			60s.	10s.	20s.	○		○	
Moudon			60s.	10s.	3s.			○	
Beauvoisin		20l.	60s.		60s.	60s.			60s.

③の項目

A - 市場における騒乱の罪
B - 入市税の未納
C - ア: 異なる人物への食肉販売
イ: 病気肉販売
D - ア: 不正な秤・升の使用
イ: アを二回以上行った場合
E - 葡萄酒令違反

[凡例] 1: livres s: sous d: deniers ○: 領主の恣意に委ねられるもの
[註] これらの罰金額は一般男子に課される額であり、通常女性の場合はその半額が課され、また
12歳以下の者に対してはこの罰金の適用から除外された。

[典拠] R. Marriotte-Löber, *Ville et seigneurie*, pp. 80-81 の表から作成。

の収入をもたらしたバナリテは、北東フランスの多くの特許状が廃止していたにもかかわらず、「パン焼き竈と水車は、伯の所有でなければならぬ」[VILLE NEUVE²⁵]としていずれの特許状も留保している。また「かかること〔特許状の授与＝筆者〕のためには、住民達自身の出費によって次のものを供さねばならない。即ち、一つの完全にして良き水車、ならびに新しき水車を設置するために必要となる道路、さらに完全な竈を一つ」[ST.GENIX¹⁶]という規定に見られるように、特許状授与がバナリテを新たに認める契機になっている場合もある。²⁶⁾

軍役奉仕についてみると、定量化されてはいても、北東フランスの多くの特許状が自らの集落を守るための軍役という性格を強く示していたのに対し、例えばシャンペリーの特許状では、軍役の範囲は遠くアルプス山脈のモン＝スニ峠及びサン＝ベルナル峠まで、また一年の総軍役日数は40日間としている。その他ヴィルヌーヴ＝ド＝シロンは1回につき1日以内、範囲はシオン司教区内のレマン湖まで。ブルは1回につき3日以内。サン＝モリスは1年の総軍役日数は20日間で、範囲はジュネーヴ、ローザンヌ、シオン司教区内。モードンは1回につき1日以内、範囲はジュネーヴ、ローザンヌ司教区内。ポン＝ド＝ビュボワザンは1回につき1日以内の軍役がそれぞれ課されてい

る。これらの軍役は、より広い領域の守護が領民に課されている点、また年間の回数が限定されていないという点において、その内実は高負担なものではなかったか、と思われる。このように経済的側面に関する限り、領民が恩恵を受ける要素は十分ではないと思われる。

それでは政治的な面、例えば領民共同体の自治的な政治組織はどうであろうか。当該伯領でも個々の集落内に共同体側の利益を代表する役人が存在する。史料中で *sindics* と呼ばれるようになった役人は、新住民の受け入れ [AOSTE⁶¹]、共同体会計の管理 (VILLE NEUVE)、諸賦課の徴収 (BOURG)、賦課徴収・新住民の受け入れ [ST.MAURICE⁶⁵]、バイイとの交渉 (MOUDON)、城代との交渉 (BEAUVOISIN) を行っており、機能面から判断すればこのサンディクは、北東フランスの多くの特許状がその設置を認め、選出を領民に委ねたメール (*maire*) と、ほぼ同等の役割を果している。²⁷⁾ しかしこの時役人の設置ないし機能を確定する史料は必ずしも *Charte de franchises* ではないことに注意すべきである。アオストとサン＝モリスの特許状を除き、他の特許状並びにその系列下の特許状には住民の政治組織に関する規定はなく、またアオストの特許状も5回目の授与 (一三三三年) でようやくサンディクに関する上記の規定が挿入されている。²⁸⁾ では彼らは特許状授与以前

から存在していたのかというと、彼らの史料初出は14世紀と遅く、この頃ようやくサンディクは設置されたとみる方が妥当である。また「多くのサンディク達は、領主の命によりて、かつ裁判官、城代ならびに我々の領主のその他の役人達の同意を以て選ばれる」[ST.MAURICE⁶]とされ、その選出権限は領主側にあった。²⁹⁾ このサンディク創設の経緯については本稿では取り上げない。ただ以上から、目的の一つにメールの設置を掲げていた北東フランスの特許状とは異なり、サヴォワ伯領の特許状は領民への自治的政治機能の賦与を目的として含んでいなかったことは確認されよう。

②伯の政治的・経済的意図

本項では、授与者である伯の視点から、特許状に現れる伯の政策的意図を明確にする。前項では多くの特許状がバナリテを留保していることを確認した。ただバナリテのうち「いかなる者も塩の升を持たない。その仕事に従事し、領主並びに彼の城代の命によってそれを持つものを除いては」[ST.GENIX²¹]とか「領主は当地において、それを用いて計られるべき自らの秤を有す」[CHAMBERY³⁶]というような、市場で使用する升や秤に対する領主独占権の主張は、北東フランスの特許状には確認されず、伯の市場統制に関する強い意欲の現れと理解出来る。³⁰⁾ このことは

刑法規定においても確認される。例えば表4①～③は罰金額の一覧であり、③が商行為上の違反に対する罰金であるが「市場開設期間中に市場を破壊した者は、領主である伯に対して60スーを支払わねばならず、伯並びに集落に居住する者は壊れた所を直し、その損害を不正をなした者どもに償わせるべし」[CHAMBERY²⁰]とされ、その罰金額は他の暴力行為などの罰金額と同額の高額になっている。³¹⁾ また不正な升を使用した場合、それが2回以上に及んだり、「大きい升を用いて商品を買入れ、小さい升を用いてそれを販売した」[AOSTE⁸⁰]場合には、罰金の支払いでは済まされず伯の流血裁判権の下に置かれることになっている。³²⁾ デュバルルに従えば、こうした市場統制への伯の意欲は、当地の事情からして当然であった。³³⁾ サヴォワの中核都市の一つモン＝ランの流通税徴収簿を検討した彼によれば、当時サヴォワ地方はモン＝スニ峠とサン＝ベルナル峠を有し北西ヨーロッパとイタリアを結ぶ重要な交易路上にあったが、自領内には有力な産品がなく、またこの頃には北アルプスや地中海を通る新たな交易ルートも開発されつつあった。そこで当該伯領においては、都市を中核とする地域産業の振興をはかるよりも、交易地として市場・交易路の秩序維持を計り(週市ないし大市に来たる者は、伯の保護の下に置かれ、無事にして安全である)[EVIAN⁸⁰]、

またそこからの諸税の徴収を徹底させることが必要とされたという。このことが特許状の内容にも反映したのである。先の集落イヴェルダンの会計記録では週市及び年市からの税収は281と決して多くない。しかし例えばヴィエンヌとリヨンを結ぶ水運路上に位置するサヴォワ西部のサン・シノンポリアン(一二五七年に特許状受領)の会計記録(一二六〇―六二)では、総収入3001のうちこの地を通過する商人・商品に課される流通税収入(大通行税(Grand péage)と小通行税(petit péage)の合計)は6001に達している。⁽²⁶⁾伯はサヴォワ伯領の地理的位置に由来する経済的好機を、自領の実情に則して活かすため、特に市場統制に対して今見たような熱意を持ってあたっていたのである。⁽²⁷⁾

一方、罰金に関する詳細な規定の存在は伯が、その裁判権の下で市場も含め集落全体の平和を維持しようとする意図の現れと理解することが出来る。「全てのブルゲンセス及び外来者さらに全ての住民は、領主(＝伯)の裁判権の下にあり、彼の法廷(curia)において争うべし」[EVIAN8]あるいは「余は、当該集落において裁判権の完全なるもの(merum)を維持する」[VILLE NEUVE 19]という形で、伯による完全な裁判権の掌握を記した特許状は必ずしも多くはないが、殆どの特許状は上級裁判権が「領主である伯に帰属する」「伯の意の下にある」「伯の慈悲

(misericordia)の下にある」ことを明記している。そして特許状受領集落に関係を持つ中小領主層は、完全に当地の支配権から排除されていない場合でも、裁判権に関しては副支配権(vicedominatus)を有するにとどまり、下級ないし中級の裁判権を行使して一件につき60スーを越えない限りで徴収された罰金額の、その約1/3を受け取る存在となっている。さらに伯の裁判権との関連では、先に挙げた特許状の系列の広がり、この後14世紀に整備されるバヤージュ、即ち伯の上級裁判管区と一致していること、そして系列の核となる特許状を受領した集落が同時にバヤージュの中心地にもなっていることがあらためて指摘できるだろう。⁽³⁰⁾これらの点をまとめるなら、特許状の授与は、受領集落を伯による統一的な行政組織及び流通構造の下に組み込んでいく過程を示しているのではないかと思われる。この点は政治的・経済的機能を併せ持つものとして理解された受領集落の性格とも一致する。そしてこうした過程と関連するのであろう、規定の具体的な内容は、多少の差はあるものの各系列の特許状ともよく類似し、高い均質性を持っている。かかる均質性は北東フランスの特許状には類を見ない。典型的なのは罰金額で、最高罰金額が概ね60スーに統一されている。ただしプールやポン・ド・ビュー・ヴォワザンといった13世紀に入って新しく伯の影響下に

入っていったプレス地方とヴィエンヌ地方の系列をそれぞれ代表する特許状では、この点の統一は不十分であり7スーの罰金額が散見される。⁽³¹⁾

(3) 授与―受領を巡る在地の政治状況

(2)―①で確認した特許状の内容は、特許状普及の背景を経済的要因に求めること、また近年の研究動向が指摘するような政治的要因に求めること、そのいずれもが困難であることを示していた。領主の経済的圧迫や政治的集権化に対する領民の抵抗を考慮した妥協的性格を持つものとして特許状の内容を理解することが難しいとすれば、我々は特許状普及の理由をどのように考えたらよいだろうか。新開発村(villa nova)であればともかく、既存集落の住民も(2)―②で見たような志向を持つ特許状を抵抗なく受け入れており、多額の金銭を支払ってまで獲得している事例も確認される。特許状前文に見られる「この住民たちの要求におこつて(collectibus et petentibus dictis hominibus)」という表現がそのまま真実であったとは言えない。しかし文書授与には住民側の要請もあり、伯の意図の一方的な押しつけではなかったと考えることは可能だろうか。この問題は、①文書授与以前から伯の支配権が安定的に確定されていた集落と、②授与直前に何らかの手段を用いて伯

が支配権を獲得した集落、とでは分けて考える必要がある。⁽³³⁾しかし両集落には共通する一つの傾向が指摘される。それは近隣の中小領主・騎士層及び聖職者と集落民との経済的利害を巡る摩擦である。すなわち、伯が特許状授与の前に対抗した数多くの在地領主は同時に集落民とも衝突していた。また既に伯の支配下にあった集落でも、特許状授与前後伯に対して集落共同体からの中小領主・騎士層との係争解決の要求が格段に増加している。もっともこれらの事例は必ずしも全集落について確認されるわけではなく、特に上記①型の集落では、伯の政策的意向に基づく授与が行われていたといえるが、ここでは特許状受領によって伯との緊密な結びつきを求めたいくつかの事例を挙げてみたい。

ヴィルヌーブ・ド・シロン(2…一二二四年)は既存集落に接して設けられた新村であったが、特許状を授与された後一二二〇年に新住民の受け入れを巡ってHauterive修道院と住民との間で衝突が生じ、伯にその解決が求められている。⁽³⁴⁾プール(9…一二五〇年)では、一二五〇年の特許状授与以来 Seillon 修道院と当該集落との間で森林及び放牧地の用益について生じた争いを度々伯が仲裁している。⁽³⁵⁾またラ・コテ・サン・タンドレ(24…一二七四年)では集落民の財産処分を巡る争い、この争いは集落民と La Côté 修道院や Bozozel 教区内の貴族を始めとする五

者との間で生じたものであったが、それを伯が解決している。⁽³⁶⁾サン＝モリス(30…一二八五年)では、流通税及び集落防衛費用の支払いを拒否した騎士Raoul de Novilleと住民との争いに伯が介入し騎士側に上記賦課の支払いを認めさせている。また当地では一二九四年と九六年にも同様に賦課の支払いを巡って修道士QuaréryとJacques de Peraisoとの間に衝突が生じたが、これにも伯が介入して和解に至らせている(修道士の上記賦課の支払いを免除)。⁽³⁷⁾こうした争いは近隣住民との間にもみられる。エヴィアン(15…一二六五年)の住民は、自村に隣接するBrestの森において無断で山羊の放牧を行った隣村の住民の追放を伯に訴え、伯も城代にその取締りを命じている。⁽³⁸⁾

こうして確実にいくつかの集落では、近隣住民や領主層から集落共同体を保護し平和を維持する存在として伯が必要とされていた。そしてこの時授与・受領された特許状は、これらの人々を一方的に排除するのではなく、二通りの方法で彼らとの共生を計っている。まず第一には、彼らを共同体の枠内に取り込んでいくようにしている。特許状中の各条項は、〈quis〉〈aliquis〉〈quicumque〉を主語とし、主体を特定しないことで既に一定領域内に居住する全住民を対象としている。が、前文あるいは新住民の受け入れに関する規定からは、特許状の対象者が当初〈homines

residentes in villa〉〈habitatores in villa〉であったのに、13世紀中頃からは伯に対して宣誓をなした者を示す〈burgenses〉〈nobles〉13世紀末には〈nobles〉〈milites〉へと拡大されていくことが分かる。⁽³⁹⁾また上で度々問題となっていた中小騎士、聖職者による共同体防衛費用の支払いについて、伯の裁定を時代を追ってみると、全面的な免除から支払い命令、そして強制へと共同体側の立場を尊重する方向へ確実に向かっている。⁽⁴⁰⁾そして彼らも含めひとたび集落共同体の一員となれば、「領主並びに集落は、この者をあらゆる方法を以て手助けし、守るべきである」[CHAMBERY II] ⁽⁴¹⁾「集落と領主はその法の下でその者を保護すべき」[ST. GENIX 4]であった。⁽⁴²⁾当該期のサヴォワ伯領において複数の研究者が指摘する中小領主層の経済的衰退は、こうした動きに連なっていくと思われる。⁽⁴³⁾対して第二に、(2)―②の後半で見たように、裁判権限を限定されながらも依然として当地の諸支配権を維持していた中小領主層もまた存在していた。もっともサヴォワ伯領ではこうした領主層が自ら当事者となって特許状の授与に参加することはない。北東フランスの場合、中小領主層もまた諸侯と協働して、或いは単独で自領内の集落に積極的な特許状を授与している。但しその際には諸侯の確認を必要とし、記載内容の遵守を諸侯に誓約し、未決の村落

裁判の裁定を諸侯役人に委任する旨を特許状中に明記することが多く、⁽⁴⁴⁾特許状の授与を通じて、諸侯―中小領主間関係が(裁判権限の帰属を中心に)規定される側面も確認された。こうした事例と比較した時、サヴォワ伯領では中小領主層の特許状授与への消極姿勢によって、上述のような副支配権を有する彼らと諸侯との関係をこの文書から十分に読みとることは残念ながら出来ない。

(4) 小括

サヴォワ伯領の特許状は、領民に認められた特権の内容において北東フランス地方のそれを上まわるものではなかった。サヴォワ伯領についての諸研究者も、この地に普及した特許状が決して領民に十分なものではなかったことを認めている。⁽⁴⁵⁾ただ彼ら特にペランは、特許状を受領したサヴォワ伯領の諸都市は重要な交易路上に位置するというその地理的な位置に助けられて、十全な発展を遂げたという理解している。⁽⁴⁶⁾しかしサヴォワ伯領下の諸都市は、有効な産品を持たなかったこと、また特許状に規定された伯による厳格なまでの市場統制が妨げとなって、むしろ都市の自由な経済的發展が阻害されたという側面を持っているのではないだろうか。かなり時代を下るが16世紀にサヴォワ家に仕えた思想家ボデロは、自らの地方には貧弱な都市しか存

在していないことを認めている。⁽⁴⁷⁾特許状は領民側に自律的な経済的・政治的發展の機会を与えたとは言えない。

伯は、主として諸賦課の固定化という方向でのフランシーズを認める一方で、バナリテや罰金の徴収にあたっては商業統制とともに主導性を発揮している。また賦課内容及び罰金額については、多少地域的な違いは在るものの全体としては非常に均質であるが、より詳細に見れば、それらは将来の行政・上級裁判管区に対応する形で複数の系列に分類される。集落民は、特権の内容において必ずしも十分とはいえないこの特許状の受け入れによって、伯の保護下で近隣の中小領主・騎士層・聖職者の干渉を排し、彼らをも取り込む形で共同体的凝集性を高めていった。このような特許状の性格は、諸侯主導の下で固有の法慣習を持つ地域を統合し、そこにひとつの統一的かつ組織的な法体系を築き上げようとする試みこそが、サヴォワ伯領におけるCharte de franchisesの授与であったということの意味していよう。⁽⁴⁸⁾次節では、こうした性格を持つ特許状の作成・授与を可能ならしめたサヴォワの法的背景について考えてみたい。

註

(1) R. Mariotte-Löber, *op. cit.*, pp. 21-35.

- 27, 1872 (ZVL G. Forel, *Chartes communales* 2 卷 2 冊) の
21, p. 58.
- (6) Grancour : F. Forel, *Chartes communales*, pp. 40-41. ;
Mont le Vieux : J. Bugnion, *Les Ville de franchises*, p.
58. ; Romont : F. Forel, *Charte communales*, pp. 63-65. ;
Morgex : J. B. de Tiliier, *Franchigie*, pp. 38-39. ; Les
Clées : J. Bugnion, *Les villes de franchises*, p. 56.
- (7) J. Bugnion, *Les villes de franchises*, pp. 49-68. 今回「キー
地方の特許状はフォレルの著作に付されたものを利用したが、
題名を「ヴォー地方の」コンチーン特許状」としてゐること
からも伺えるように、彼はこの地方の特許状を極めて自治的色
彩の強いコンチーン文書と考えてゐる。しかし彼のこの見解に
は、フニョンが批判を加えてゐる (J. Bugnion, *op. cit.*, p.
103.)。フニョンの言う通りヴォー地方の特許状にはコンチー
ン結成を承認する条項が存在してゐらず、フォレルの見解は修
正を要するよう思われる。また彼の史料刊行の不備に關して
は、フズロンが指摘してゐる (R. Déjion, *Yverdon au Moyen
Age* (XII^e - XV^e siècle), Lausanne, 1949, p. 32.)。しかし本稿
では史料入手が困難であつたためフォレルを利用せざるを得な
かつた。デグロン、フニョンの研究を対照をせつつ用いたが、
この点に容赦願ひたい。
- (11) 後述 26 頁参照。
- (12) CHAMBERY : L. Cibrario, *Documenti*, p. just. III, p. 126. ;
AOSTE : L. Cibrario, *op. cit.*, pp. 33-36. ; VILLE NEUVE :
F. Forel, *Chartes communales*, n^o 1, p. 3. ; ST. MAURICE :
R. Mariotte-Löber, *op. cit.*, p. 65.

- (23) L. Cibrario, *op. cit.*, p. 130.
- (24) *ibid.*, p. 33.
- (25) P. Duparc, Un péage savoyard sur la route du Mont Cenis aux XIII^e et XIV^e siècles, Mommélan, *Bulletin philologique et historique du comité des travaux historiques*, année 1960, Paris, t. 1, 1961, pp. 145 - 187.
- (26) G. de Manteyer, *Les origines de la Maison de Savoie (910-1060)*, vol. 2, Genève, 1978, pp. 271 - 275.
- (27) ちやに付け加えれば、アメーテ五世の父親トマニ世は短期間だがフランドル伯の地位にあり、この時築かれたフランドルとサヴォワとの緊密な結びつきが、西ヨーロッパの重要な商業拠点の一つであるフランドル地方をよりサヴォワ方面と結び付けることを可能にしていた。13世紀の後半にサヴォワ地方のモンメランで徴収された流通税の徴収簿を見ると、フランドル産の毛織物などが特に多く運搬されており、さらに徴収総額はこの13世紀後半から末にかけて著しい伸びを示し、13世紀末には伯家収入全体の1/20を占める程になっている。P. Duparc, *op. cit.*, pp. 184 - 185.
- (28) F. Forel, *Chartes communales*, n. 1, p. 6.
- (29) サヴォワ伯領の特許状では上級裁判権に属する犯罪として、重大な傷害・殺人・窃盗裏切り・火事・強姦・誘拐・悪質な不正升・秤の使用が挙げられていて、R. Mariotte-Löber, *op. cit.*, p. 82.
- (30) R. H. Bautier et J. Sornay, *op. cit.*, p. 345.
- (31) この点では、ウオー地方のモードン系列は統一的である。ウオー

地方の罰金額は特許状授与以前にはかなりはらうべきであった。

Rue(32)の裁判証書に於て1121年に泥棒に対しては30スー、棒を使って暴力行為を働いた者に28スー、他人の山羊を窃盗したものに7スーの罰金がそれぞれ課されていたが、1178年特許状授与の直前はこの地の罰金額は60スーに統一化された。³² J. Bugnon, *op. cit.*, p. 22.

(32) この表現は「ナンベリー系列」に共通する。R. Mariotte-Löber, *op. cit.*, pièces justificatives, p. 209.

(33) 本稿 8-9頁参照。

(34) R. Mariotte-Löber, *op. cit.*, pp. 191-193.

(35) *ibid.*, pp. 118-121.

(36) P. Vaillant, *Les libertés des communautés dauphinoises*, Paris, 1951, p. 113.

(37) R. Mariotte-Löber, *op. cit.*, pp. 171-175.

(38) *ibid.*, pp. 128-131.

(39) 全づの特許状は、Nyons(88: 1293)・Morges(14: 1328)・Moudon(92: 1328)・Romont(88: 1328)・Yverdon(88: 1328)などには確認できず、F. Forel, *op. cit.*, pp. 37-76.

(40) <quicumque voluerit manere in villa, debet ponere in communis si opus est, Capellani et clerici liberi sunt nec debent ponere in communis nec in munitione ville> 1117年・St-Genixの判決。<capellani et clerici ponunt in communis et in munitione ville prout jus exigit> 1118年・St-Laurentの判決。<burgensis et habitatores dictae ville, tam ecclesiastici quam clerici, debent ponere in communis villae nullus neque clericus neque sacerdos>

habeat privilegium taillandi se in communis> 1121年・St-George d'Esperancheの判決。R. Mariotte-Löber, *op. cit.*, p. 89.

(41) L. Cibrario, *op. cit.*, pp. 126-133.

(42) A. Dufour, *op. cit.*, p. 124.

(43) R. Mariotte-Löber, *op. cit.*, p. 85; P. Vaillant, *La politique*, pp. 45-50.

(44) 前掲拙稿、九四一九五頁。

(45) P. Vaillant, *op. cit.*, p. 323; Ch. Ed. Perrin, *op. cit.*, pp. 51-54.

(46) Ch. Ed. Perrin, *op. cit.*, p. 52.

(47) G. フロカッチ(斎藤泰弘・豊下櫛彦訳)『イタリア人民の歴史』未来社、一九八四年、二四七頁。

(48) ヴォー地方では十分実現しなかった伯の勢力拡大は、領民との討議の場を身分制議会に移してその後も試みられることになった。ヴォー地方の身分制議会(États de Vaux)について、A. P. Bagiani et J. F. Poudret(ed.) *La Maison de Savoie et le Pays de Vaud (Bibliothèque historique Vaudoise 97)*, Lausanne, 1989, を参照。

V 特許状作成・授与の法的背景

北東フランスと比べ統一的で、諸侯側の集権的志向を優先させた内容を持つ特許状の授与・普及を可能ならしめた特殊サヴォワ的な背景を考える上で手がかりになると思われるのが、IV(1)で確認した「系列」の相違、すなわ

ちモードン系列を除くサヴォワ伯領の特許状の普及のあり方と、モードン系列の特許状及び北東フランスの特許状の普及との相違である。というのも、モードン系列の特許状が普及したヴォー地方を北東フランス側に含めると、この相違はフランス法制史において一般的にいわれる慣習法地域と成文法地域との区分に対応しており、このことからサヴォワ伯領の特許状の特質は、ローマ法が法総体を構成する成文法地域にサヴォワ地方が位置していたことと関連しているのではないかと思われる。13世紀後半以降諸領邦への分裂によって神聖ローマ帝国が政治的勢力を失っていく一方で、当初皇帝が自らの権力集中のために皇帝世界法として主張したローマ法は、「国王(諸侯)はその王国内においては皇帝である」という主張とともに今度は各国国法や帝国内の領邦君主の権力集中に奉仕したと言われる。サヴォワの場合でも伯がこのような形でローマ法的理念の導入を意図したことは十分に予想できるだろう。通常フランス史では、農業生産力の低さに由来する脆弱な領主制的基盤がこの時期の成文法地域たる南フランスについて指摘され、それゆえこの地域は集権化政策の一環として新たな法を形成する力に乏しかった、と整理される。しかしながら

このサヴォワの地では商業・流通活動が伯の収入の重要な部分を占めていたこと、またアルプス山脈に跨がる所領の

位置がイタリアでローマ法研究に携わる学識法曹との早期の接触を可能にしたことなどの理由から、むしろ成文法地域であることを背景とした新たな法の生成を行い得たのではないかと思われる。そして実際、ローマ法の影響は法実務面、即ち特許状の形式・内容・運用においてかなり明白にうかがえる。ただこの問題を本格的に論じるには紙幅が足りない。そこでここでは後の議論のための土台として、影響の幾つか(①公証人制度の採用②遺言相続の承認③裁判官の登用)を提示しておきたい。

まず特許状の形式的な側面から見ると、北東フランスの特許状には見られない公証人層が、特許状を公証し効力を与える存在として現れていることが指摘される。特許状の副署人欄を見ると、一一八九年アオストに授与された最初の特許状において既に「*meus proprius notarius*」として現れているモリスを筆頭に、ほとんど全ての特許状に公証人の称号を持つ者が署名者の一人として記されていることが明らかになる。次に内容面では、IV(2)①で見たように遺言相続が規定されていることが挙げられる。アルプス以北では8-9世紀には相続人を指定したローマ法的な文書(「遺言状」)を残す考え方は消滅していた。その後遺言の概念自体はカノン法の領域で神に対する遺贈という形式で11-12世紀に再び取り上げられたが、特

定の相続人が指定されるようになるのは漸く13世紀に入ってからである。この場合でもサヴォワ地方のように住民レヴェルにまで遺言状の効力が認められた事例は珍しい。サヴォワ伯領ではさらに13世紀後半から14世紀にかけ他国者、高利貸し、非嫡出子に対しても遺言上で相続人となる³⁾ことが認められている。

第三に、職業的な裁判官の登用が挙げられる。通例12-13世紀の段階では裁判官層の存在は知られておらず、特許状等に記された刑法規定に基づく裁判は、諸侯自身ないしはその配下の城代によって執り行われるのが一般的であった。ただ民事的な問題に関して彼らは無力であり、ローマ法の素養を身につけた人材が将来的には必要とされることとなる。しかしサヴォワ伯領では他所に先駆けて、特許状の普及に並行して13世紀前半から職業的な裁判官(*soi-juges*)の登用が知られている。このことは裁判証書に*«index comitis»*の呼称を帯びた人物が現れることから確認される。例えば、ヒール＝ロンバルは、一二五〇年のアオストでの裁判にサヴォワ伯領初の裁判官として現れた後、3年間ほどアオストで出された多くの証書で確認される。そしてその後の10年間にサヴォワ、ヴィエンヌ、シャブレールを中心とする各地の証書に次々と新しい裁判官の名が現れている。彼らはそれぞれ管轄区域を与えられており、

例えばジュネーヴ、シャブレール地方はジャン＝ダルバルが、またサヴォワ、ヴィエンヌ地方はフランソワ・デュプレニキオが、といった具合であった。⁴⁾隣接するジュネーヴ伯領やドーフィネ公領、またサヴォワ地方内でもヴォー地域では13世紀中に専門的な裁判官は存在しておらず、この点でサヴォワ地方特にその中核地域の先進性は明らかである。このようにサヴォワの地はローマ法的技術の導入において積極的であった。サヴォワ伯領はイタリアとアルプス以北を結ぶ交易の要地であり、2つの世界をつなぐ窓口の役割を果たしていたが、交易・流通面にとどまらず、法意識の展開という側面においてもその役割は発揮されたと言えるだろう。

最後に、こうしたサヴォワ伯領の特許状の独自性とその背景を踏まえ、「慣習法文書」の地域類型的把握という観点から、北東フランスの特許状(*Charte de franchises*)とサヴォワ地方の特許状(*Charte de coutumes*)を同一の史料類型と見なして良いのか、という問題について考えてみたい。わが国ではこれらの文書史料に対して等しく「慣習法文書」という訳語を与えていることから分かるように、両者を全く区別せずに用いているように思われる。またフランスの学界においても区別の意識は明確ではない。しかし、北東フランスにおいて授与された特許状が、

その前文において当地の慣習を承認・成文化する旨を宣言したまに*Charte de coutumes*であるのに対し、サヴォワ伯領下の特許状では当地の伝統的な慣習法の承認・成文化という表現をとるのはモードン系列だけである。北東フランスの特許状は、地域の伝統的な慣習法に規定される側面を持っており、新たな法体系の整備という点では限界を持つ。他方サヴォワ伯領の特許状は、かかる法文書の授与・受入れの過程を経て新たな法を積極的に生み出していることとするものであった。かりにサヴォワ地方の特許状を「慣習法文書」と呼ぶにしても、それは伯による一連の特許状授与が「新たな慣習法」を作ろうとする動きだったと理解する限りにおいて、すなわち北東フランスとはニュアンスを異にして初めて可能なのではないだろうか。

こうしたことを考えると、両者を同一の史料類型と見なし、個別的な内容の差異を以て当該地域の政治的・経済的構造の違いを云々する程度では不十分ではないかと思われる。ただ本稿がもとめと神聖ローマ帝国とフランス王国の境界という特殊な地帯的条件にある諸侯領を対象としたものであることを考えれば、そこから更に進んで従来「慣習法文書(*Charte de franchises* / *Charte de coutumes*)」の名で総称されている史料の区別・区分を主張するためには、今後更なる検討が必要であらう。

註

- (1) P. Ourliac et J. L. Gazzaniga, *Histoire du droit privé français*, Paris, 1965, pp. 79-80. F. オリヴィエ＝マルタン(稿訳)『フランス法制史概説』創文社、一九八六年、三二八頁。
- (2) 山口俊夫『概説フランス法 上』東京大学出版会、一九七八年、二〇頁。木村尚三郎『フランス社会の形成』井上幸治編『フランス史(世界各国史2)』山川出版社、一九六八年、七九-八〇頁。
- (3) 公証人の称号は、時代ごとに特徴を持っている。12世紀末-13世紀初めは皇帝などの上級権威にその公証力の源を求めている表現が多いが(*notarius sacri palatii*)、世紀前半には公証人が伯との結びつきを強めたことを示す表現が増える(*notarius domini Amedei comitis*)。そして再び皇帝権威との結びつきを示す表現が現れた後、世紀後半にそれは減少し、以後いかなる保護権力の由来も示さなくなり(*publicus notarius*)、それが一般化していく。もちろんこうした表現が確実に実態的な意味を持っていたかについては慎重になるべきであろう。清水廣一郎「中世イタリア都市における公証人」『イタリア中世の都市社会』岩波書店、一九九〇年、五四-五五頁を参照。
- (4) P. Duparc, *La pénétration du droit romain en Savoie (première moitié du XIII^e siècle)*, *Revue historique de droit français et étranger*, t. 43, 1965, pp. 61-70.
- (5) この遺言相続規定の持つ独自性に関してはヴァランも指摘してゐる。P. Vaillant, *La politique*, p. 243.
- (6) P. Duparc, *op. cit.*, p. 80.
- (7) *ibid.*, pp. 81-83. この面のプロンボグ・ラフィッシュな研究が進

展していない現況では、この裁判官職が特定の家系に収斂して陪層を形成していたと見解するには至らないが、この後サヴォワ伯の封臣層の子弟が選ばれてアルプスを越え、ボローニャに赴き研鑽を積んで、専門化した裁判官身分を形成していくまでの間、法発展にとって既述の公証人層が果たした役割は大きかったと思われる。マックス・ウェーバー（世良晃志郎訳）『法社会学』創文社、一九七四年、三四四―三四七及び四六九頁。